2023年10月8日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

ぶどう園にようこそ

［イザヤ書5章1節～7節］

わたしは歌おう、わたしの愛する者のために／そのぶどう畑の愛の歌を。わたしの愛する者は、肥沃な丘に／ぶどう畑を持っていた。
 よく耕して石を除き、良いぶどうを植えた。その真ん中に見張りの塔を立て、酒ぶねを掘り／良いぶどうが実るのを待った。しかし、実ったのは酸っぱいぶどうであった。
 さあ、エルサレムに住む人、ユダの人よ／わたしとわたしのぶどう畑の間を裁いてみよ。
 わたしがぶどう畑のためになすべきことで／何かしなかったことがまだあるというのか。わたしは良いぶどうが実るのを待ったのに／なぜ、酸っぱいぶどうが実ったのか。
 さあ、お前たちに告げよう／わたしがこのぶどう畑をどうするか。囲いを取り払い、焼かれるにまかせ／石垣を崩し、踏み荒らされるにまかせ
 わたしはこれを見捨てる。枝は刈り込まれず／耕されることもなく／茨やおどろが生い茂るであろう。雨を降らせるな、とわたしは雲に命じる。

イスラエルの家は万軍の主のぶどう畑／主が楽しんで植えられたのはユダの人々。主は裁き（ミシュパト）を待っておられたのに／見よ、流血（ミスパハ）。正義（ツェダカ）を待っておられたのに／見よ、叫喚（ツェアカ）。

[1]　「ぶどう畑」に対しての審きと憐み

礼拝では基本的に『聖書教育』誌に聖書箇所を合わせておりますが、今月は少し前倒しで進めさせて頂きたいと思います。（22日は召天者記念礼拝、29日は、神学生による宣教になります）。先週も見ましたイザヤ書の「ぶどう畑」についてのメッセージは、実は『聖書教育』では来週も再来週も続くのですが、今日、一気にその部分も含め、取り上げたいと思っています。少し聖書を朗読する部分が多くなりますが、ご一緒に味わって行ければ幸いです。

本日のイザヤ書5章に出てくる「ぶどう畑」とはイスラエルのこと、そしてこのぶどう畑を丹精に手入れをされているのは主なる神様のことです。その手入れは簡単なことではなく、美味しい甘い実が出来るためには、農夫の方が相当努力をして、あとは時が来るのを待ちます。ところが実ったのは酸っぱいぶどう（腐ったぶどう）であったというのです。そのように、“イスラエルよ、あなたはわたしの愛の中にありながら、わたしを落胆させたね、あなたを植えた土地は芳醇な大地であったのに、そこをあなた方は、裁きの代りに流血、正義の代わりに叫喚が満ちる場所にしてしまった。わたしはこれを見捨てる”と神様は仰います。不信仰と不誠実なお前たちなどもう見たくないと、ここでは審きを語るのです。

しかし、飛んでイザヤ書の27章になると神様は心を変えられています。神様が心を変えるなんておかしいと思われるでしょうか？しかし、神様は心動かされるお方なのです。どうして？生きておられる方だからです。神様イコール「運命」とか「呪い」ではありません！27章2～5節にはこのように言われています。

「その日には、見事なぶどう畑について喜び歌え。
主であるわたしはその番人。常に水を注ぎ／害する者のないよう、夜も昼もそれを見守る。わたしは、もはや憤っていない。茨とおどろをもって戦いを挑む者があれば／わたしは進み出て、彼らを焼き尽くす。そうではなく、わたしを砦と頼む者は／わたしと和解するがよい。和解をわたしとするがよい。」

不信仰と不誠実の故に自らのぶどう畑を汚してしまったイスラエルに向かって、イザヤは、神様の回復の預言を語ります。そして、神様の方から「わたしと和解するがよい」と、待っていて下さっているのです。鉄槌を下すのではなく、神様というお方は、どこまでもご自分が造られた存在に対して憐れみ深い方、自ら責任をお取りになろうとされるのです。これは驚くべきことではないでしょうか。

[2] ただこの事実の前に立ち返ろう

そして、このような流れの中で、新約聖書で、主イエス様は「ぶどう園の譬え話」をも語られたのではないかかと思います。今日はここで、特に「平等な賃金払いの譬え」とも言われる、「神の国」について主イエスが語られたこの譬え話を、改めて見て行きたいと思います。マタイによる福音書20章1～16節までです。

「天の国は次のようにたとえられる。ある家の主人が、ぶどう園で働く労働者を雇うために、夜明けに出かけて行った。主人は、一日につき一デナリオンの約束で、労働者をぶどう園に送った。また、九時ごろ行ってみると、何もしないで広場に立っている人々がいたので、『あなたたちもぶどう園に行きなさい。ふさわしい賃金を払ってやろう』と言った。それで、その人たちは出かけて行った。主人は、十二時ごろと三時ごろにまた出て行き、同じようにした。五時ごろにも行ってみると、ほかの人々が立っていたので、『なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか』と尋ねると、彼らは、『だれも雇ってくれないのです』と言った。主人は彼らに、『あなたたちもぶどう園に行きなさい』と言った。夕方になって、ぶどう園の主人は監督に、『労働者たちを呼んで、最後に来た者から始めて、最初に来た者まで順に賃金を払ってやりなさい』と言った。そこで、五時ごろに雇われた人たちが来て、一デナリオンずつ受け取った。最初に雇われた人たちが来て、もっと多くもらえるだろうと思っていた。しかし、彼らも一デナリオンずつであった。それで受け取ると、主人に不平を言った。『最後に来たこの連中は、一時間しか働きませんでした。まる一日、暑い中を辛抱して働いたわたしたちと、この連中とを同じ扱いにするとは。』主人はその一人に答えた。『友よ、あなたに不当なことはしていない。あなたはわたしと一デナリオンの約束をしたではないか。自分の分を受け取って帰りなさい。わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。自分のものを自分のしたいようにしてはいけないか。それとも、わたしの気前のよさをねたむのか。』 このように、後にいる者が先になり、先にいる者が後になる。」

イエス様の有名な、素晴らしい譬え話ですね。そうか、神様の国に招かれるのに、早いとか遅いとかは無いのだ、ということが言われているのだとも言えます。つまりその時が人生の若い時であろうが、終りの頃であろうが、ただこの私を招いて下さっているお方がいるということを語られていると読むことが出来ますし、また、救いの歴史は初めはイスラエル民族をモデルケースのようにお選びになったのかもしれないが、そこからどんどん神様の愛は全世界に色々な壁を超えて広がっていった、と捉えることも出来ます。皆さんはどのようにこの譬え話をお聞きになったか、様々な思いがおありだと思いますが、私は、ちょっと今回考えさせられたのは、この神様の招きを受けた後の「人々の交わり」ということです。

と言いますのは、多くの時間を働いた者たちが文句を言っている言葉が気になりました。「わたしたちと、この連中とを同じ扱いにするとは」という言葉です。ちょっと気になります。彼らも雇われた時は「感謝」があった筈です。しかし賃金が払われた時、遅くから働いた者と「同じ扱い」にされることが面白くない。沢山働いたのですから同じ賃金扱いは嫌だと言う訳です。でもどうでしょう、私はこの言葉に冷たさを感じます。「同じ扱いにするとは」！そこにあるのは「俺たちの方が上だ」という上下関係の意識です。朝から働いた俺たちの方が上等だ、というエリート意識と言ったらよいでしょうか。確かにこれが「労働」ということで割り切るのなら、文句が出るのも当然かもしれません。しかし私は思ったのですが、この雇い主は、このぶどう園の中の“交わり”を産み出したかったのではないかと。「同賃金」というのは、この雇い主は、人を「生産性」「労働力」で捉えていない、ということです。―そして、このことは私たちの信仰生活についても吟味することがあるのではないかと思います。…私たちはどこかで「あの人と一緒にされたくない」とか「わたしの信仰の方が上だ」とか思ってしまうことがないでしょうか？―。初めは、この私が神様に見出して頂いた感謝から始まっているにも拘わらず、いつしかそんな傲慢な気持ち、隠れた罪が自分の中にあるということに気付かされることがあると思います。そしてその気付きは大事です！私たちは、自分がただ主に見出して頂いただけの存在であるという事実に幾度も立ち返らなければならないと思います。そうでないと、同じ信仰者の交わりが、上下関係や好き嫌い、人間的感情に覆われてしまうのです。悲しいことです。主は、「それで本当に神の国に生きていることになるのか」とたしなめられているのではないでしょうか。「お前の中のいびつな“自分は偉い”というエリート意識を捨てよ」と仰っているのではないでしょうか？ですから主は、「先にいる（と思っている）者が後になる」 とわざわざ言われているのではないか、そんなことを思いました。

私たちは、ただこのご主人の人間的な条件を度外視した「気前の良さ」（許し）によって、神様の御手の中に招いて頂いているお互いなのです。その主人の「気前の良さ」というのは、あの主の十字架によって決定的なものになりました。私たち自身では自分を救うことが出来ない者のために、主はご自分のいのちという犠牲を払って下さったのです。それは全く高価な犠牲です。私たちは皆その高価な主の贖いによって救われたのです。そこには何の上下関係もありません。

「ぶどう園」「ぶどう畑」。そこは神様が心を込めて手入れをして下さっている麗しい土地です。「広場」と言っても良いと思います。教会はそういう「救われた者たちの・救いに招いて頂いているすべての者たちの広場」です。

川越教会も主のぶどう園・ぶどう畑です。神様にそれぞれが招かれて、神様に「このぶどうは美味しいね」と言って頂ける私たちの交わりが既にあるのですから、その主の愛と招きに相応しく進んで行きたいと思います。主は 「小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる」（ルカ12:34）と言って下さっています。お祈り致します。

神様、きょうのこのようにあなたのぶどう園（ぶどう畑）に招かれていることを感謝致します。そのためにあなたがどんなに大きな愛を私たちに注いで下さっていることか、そこにいつも立ち返らせて下さい。主イエス・キリストこそ、まことのぶどうの木、私たちはそれに繋げられている枝々です。どうか、誇ることなく、一緒にあなたに養われていくことを喜びと出来ますように。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。